もくじ

νG7 開発物語　1

ここだけの話(野村社長のつぶやき)

事例インタビュー　28

インタビュー／早川和宏

エセ科学といわれて

人生も 70 歳を越えると、様々な出来事が伏線のようにつながり重なりあって今に続いているのだなとしみじみ思うことがある。そして、あの辛かった体験が役に立った。仕方なく我慢した。

あるいはいつまでも形にならずに諦めきれないでいたことが、何故だか何処かで組み合わさって突如として形になりかけていたりもする。無駄な経験はないというが、できれば経験したくなかったあの自動車事故が、やはりすべての発端だったと認めざるを得ない気がしている。

昭和 27 年長崎市に生まれた、株式会社ウエルネスの野村修之社長(以下、野村さん)は、30 歳を迎えた頃、居眠り運転の保冷車に追突され瀕死の事故に遭って人生が大きく変転する。

意識不明で救急搬送されたが、気がつくと何故か無傷であった。ところが、40 日後に突然吐き気がして、首筋から肩のあたりが痛み、からだの自由が効かなくなったのである。リハビリに励んでも、長く手を使っていると、筋肉が硬化して動かせなくなった。それを根気よく揉みほぐして動かすという具合で、とても仕事にはならない。

事故の過失はこちらには全くなく、事故後３年間の給料は補償されていたが、どうにか車の運転ができる状態にまで回復したとき、これでは普通の勤めは二度とできないと悟り、野村さんは、自営業の道を選択する。

その当時、大阪の水道水がかなり臭かったことと、周りに農業関係者がいたことから、浄水器や農業資材を扱う会社はどうか、と事業を始めたが、そのうち手持ちの赤や青、緑に着色したガラス砂(二酸化珪素)を使った、熱帯魚の小さなアクアリウムを発売したところ、思いがけずこれがヒットした。

容器に、カラフルなガラス砂を入れ、肉食魚のエサになる小さな熱帯魚を入れたものだが、東急ハンズの担当者が面白いといって置いてくれた。その「私の水族館」シリーズが、部屋のインテリアとして話題になり、年間１億２０００万円を売り上げる大ヒット商品にまでなったから驚きだ。

そのビジネスを始めるにあたり、ハンズから要請されてつくった会社が、ウエルネスであった。その熱帯魚ブームは７年で終わりを迎えたが、今の量子水の事業を支えてくれたのは、まぎれもなくこのヒットのおかげだった。

今にして振り返ると、ふしぎな縁によって、パズルのピースがひとつひとつはめ合わせられて、人生という風景画が完成する。残りの人生で、ぜひ完成形を見てみたい。

それには、健康で長生きする必要がある。ウエルネス、幸せに生きるために欠かせないもののひとつが健康である。それは誰よりも身にしみてわかっていた。

最初のヒット商品「私の水族館」ブームが去って、再び浄水器系の仕事に戻ったことにより量子水を生み出す(ニュージーセブン)の開発が始まった。

当時扱っていた浄水器は、逆浸透膜方式で、後に活性炭やシラスサンドなどを利用するようにはなったものの、まぁ、よくある浄水器の範疇を越えることはなく、現行の水道管に直接取り付けるだけで「お家丸ごと量子水」を実現できるタイプのエネルギー変換装置に至るまでには、発想でも技術的な問題をクリアする意味でも紆余曲折があった。そのひとつの転機となったのが、波動測定器との出会いであった。

今では、MRI や MRA などといった磁場と電場を活用した検査装置について、一般人でも医療の現場で、実際に自分が体験するようにもなったが、当時は、共振共鳴現象などといえば途端に、オカルトと怪しまれるだけであった。

波動測定器は、からだの表面の電圧や電位差を極微弱な直流の電気を測ることで可視化しようとするもので、それ以前から知られていた心電図や脳波などの交流の電気を測るものとはシステムが異なっている。

量子力学的に見れば、まずはじめに、陽子と中性子からなる原子核の周りを電子が回り続けることによって原子を形作る。ちょうど地球が太陽の周りを自転しながら公転しているように、それぞれがスピンしながらお互いに影響を及ぼし合っているのだ。

その運動エネルギーは、電子が永遠にスピンし続けることで、核と電磁気的に共振共鳴することで生まれる波動(周波数)をもっていて、原子の種類で、個々別々の周波数になっている。そして、その原子がいくつも組み合わさって分子となり、さらには、もっと大きな塊となることでわたしたちのからだの細胞になり、しまいには、物理的に見えないものから見えるものへと形を変えているのだ。

つまり、元々、すべてのものは、光に似た目には見えないオリジナルの波動(周波数)をもった極小の量子の集まりということにもなるが、その当時は、目に見えないものに端を発する現象の多くは、スプーン曲げと同じく不可思議としか理解されなかった。

もちろん、当の開発者の野村さんでも、当初は五十歩百歩だったかも知れない。野村さんは、九州工業大学金属加工学科卒業、理系出身である。化学式や周期表で表される世界に身を置いていたので、見えないが理論的に表せないものが確かにある、ふしぎな量子(素粒子)の世界に深く関わることになるとは想像もしていなかっただろう。

必要は発明の母というが、長引くからだの不調を緩和するためには、気功や霊感的な治療に至るまで、友人知人の勧めによって藁をもすがる思いで方方へ出かけた。そうした経緯があり、金属には、見えないエネルギーを溜めるものと寄せ付けないものがあり、中でもの素材でもあるステンレスには「氣」のような不可視のエネルギーを溜め込む性質があると思われる場面に遭遇した。

はじめは気のせいに思われたが、そのうち、**特定の条件を設定したステンレスのナット**の上にモノを乗せると再現性のある物理現象が起こるらしいことがわかった。

レモンやタバコをおいて置くと、ハッキリと味が変わってしまう。
これには、まだ理屈はわからないもののなんらかの規則性、法則性がありそうに思われた。

そこで、当初は水には関係のない、エネルギー変換装置の製品開発に向かった。コースター代わりにしてみると**酒の味がまろやかに**変わった。
昔から、ピラミッドパワーや念力のような話はあったが、この場合は、いつでも再現性があるのがポイントで、だからこそ物理現象と主張したかった。しかし、今でいうサイキックパワーが手品と見分けがつかないように、標準科学では形容のしょうがない世界ではあった。

やがて、具体的な製品が生まれることになる。以前からつき合いのあった養豚業者に試しに使ってもらったところ、ふしぎなことが起こり始めた。エネルギー変換装置を豚舎に10個ほど置いて３週間後に様子を見に行くと、社長が「**一体どうなっているんだ、あれ以来、豚が死なない**」と興奮していった。

ふつうは、その規模の豚舎であれば、２日に一頭は豚が死ぬ。それが、10日に一頭になったというのだ。

その後も観察したところ**「豚がよく寝るし、よく食べるし、よく太るので、出荷時期が短縮した。子豚が噛み合わないから薬がいらない。おまけに妊娠する頭数が増えているようだ」**と、まるで魔法使いのように、いいことづくめの現象が結果として起きているらしい。

しかも、野村さんの周りでも、長年、不妊治療を受けていた友達夫婦が高齢出産して「この装置のせいとしか考えられない」という。

そして、**様々な結果報告が積み重なるようになっていった。**だが、結果は確かでも、自分がびっくりしているくらいだから、他人に信じろというのも無理な話である。当然、**効果を実感させる明らかな結果が出ていても大学は信じてくれない。**

何が起きているのか解明したいと研究を持ちかけても誰も相手にしてくれないし、中には『エセ科学』とまでいうひとがいた。論より証拠というが、今でこそ、こうした特性のカギを握るのが「電子」であり、電子のはたらきで、分子間結合状態、つまり、モノの物性が変わることが理解されているが、当時はそんなだったからとてつもなく難儀だった。

だが、**理屈は良くわからないが、結果が出る**のだ。例えば、新潟のケースでは、孫のところにたむろする不良仲間を気にした祖母が、エネルギー変換装置を置いてみたところ、何故だか彼らが家に寄りつかなくなった。

また、山口の中学校でも、保健室に設置してみると、生徒たちがひとりでに癒されるようになって「先生、この部屋すごく気持ちがいい」といい、しまいには荒れていた学校全体が落ち着くまでになったという。

そうして次第に、噂が人伝に広がり、今でいう自己責任的に様々な実証結果がもたらされるようひとずてになっていった。

ある気功のグループは、ガンをはじめ難病の治療を目的として、東洋医学にエネルギー変換装置を組み合わせたところ、治癒率が一気に８割ほどに上がったという。

にわかには信じられないが、その結果は、微笑ましいものから、薬事に触れそうなものまであった。そして、その後、エネルギー変換装置を水に転用することになって(ニュージーセブンｖG7)が生まれ、次第に水の改質装置が製品の主流になった現在にも引き続がれている。
電子(量子)のふるまいによってもたらされるらしい、見えないエネルギーの共振共鳴現象は、水だけでなく、空気にも空間にも草木にもヒト以外の生きものにも影響を及ぼしているのだ。
もっとも、空気には薄っすらと水が含まれているし、宇宙においても 100%の真空は存在しないともいわれているから、当然かも知れない。

30億でも売らない

νG7は、九州の畜産業界でのテスト設置からスタートした。量子水の評判を聞いて、知り合いの業者が豚と牛を飼っている現場に装置を設置したときのこと。

豚舎の臭いが３日で消えたというのだ。そこまでは良かったが、その１週間後にその社長が血相を変えて怒鳴り込んできた。

「あの水のせいだ。そうとしか考えられん、四百万がパーになった、弁償しろ」と騒動になったのである。

社長がカンカンになって怒ったのは、量子水を飲ませていたら、出荷予定のブランド和牛から霜降りのサシが消えてしまい、売り物にならなくなったというのだ。

高級和牛は、出荷が決まってから、エサを変えて、全身にサシが入るように飼育する。
つまり、**急ピッチで運動不足なメタボ牛に変身させる****というわけだ。**

だから、**そのサシが落ちてしまった**のでは、何をしているのかわからない。

この件は、テスト設置前の合意に基づいて、息子さんのとりなしで幸いに一件落着となったが、これを目の当たりにした野村さんは「ひょっとすると、ダイエット希望の女性が量子水を飲めば痩せるのではないか？」と気づいた。瓢箪からコマとはこのことで、周りの女性たちに飲ませてみると確かに痩せ出した。

その**ダイエット効果が口コミとなり**、熊本では、**自販機式で売っていた量子水の売り上げが伸びていった。**今では、量子水の飲用で、中性脂肪や血糖値、血圧が改善される例は枚挙にいとまがない。いわば、既定路線になっているかのようだが、最初はふしぎのひと言に尽きた。

やがて、大手系列のホテルにも導入事例がではじめた。そのホテルのグループ関係者がある食品加工場を見学して、**工場特有の臭いがしない**こと、量子水を使うことで製品の**旨み成分・アミノ酸の量が２～３倍に増えた**事実を目の当たりにして導入を決めた。

「思い切って投資をしたが、その価値が良くわかった」とホテルの社長がわざわざ電話をくれた。

厨房の臭いの元となる油汚れが消えて、グリストラップも澄んでいるのを見て効果を実感したという。そして、2008年秋には、誰でも知っているような大手商社が「日本国内の販売権を30億円で買いたい」といってきた。

ちょうど、日本のほか、中国・韓国、アメリカ、オーストラリアと、特許の取得が続いていた頃のことだ。

しかし、野村さんは、その申し出をその場で断った。
「お金が目的ではない。　νG7は、天からの授かりものにちがいない」

それは、今でも、野村さんの信念である。

どうしてそうなるのか明らかにできない。理屈を完全に知ることはできなくても、量子水の効果は素直に享受すればいい。宇宙を伝播して届く太陽光の作用を深く知らなくてもお天道様の恩恵を受けられるのと同じことだ。だからこそ、自分さえ良ければいいわけではない。

実は、今でも、その手の申し出は、年に数件は寄せられている。例えば、中国の富豪が国内の総販売権を欲しがったりするのだ。それを断る理由のひとつは、製品の発売当初から現場に赴き、テスト設置で効果を確認しながらやってきて、誰にでも簡単に、並べて説明するだけで、つまり、商社のようにモノがどんどん売れていくわけではないことを熟知しているからだ。

賢明なひとなら、いきなりそんな大きなことをいわないで、一件一件、実績を積んでいくハズだと思う。

その野村さんの想いの表れを垣間見せるのが、商品のネーミングだろう。

「ニューＳＵＮ君」とは、蛇口に接続して使ういちばん小型タイプの量子水キットの商品名だが、おしゃれでもない、製品特性を表してもいない、サン君って何と思わせるネーミングだが、野村さんとつき合っていると、それが、自分の子どもをたかし君、ゆうじ君と呼ぶのに似て、製品に対する愛情、愛着からくるものだろうと納得する。

時には周りからの要請で、苦労しながら製品開発をして、水道管元付機種のほかにもシャワーヘッド、浄水器、携帯用の製品とラインナップが増えていった。

中でも現在、 シリーズの中νG7 で、飲用量子水製造の最高機種となるヘキサゴンとリバースは、発見時にはかなり進行したガンに蝕まれた娘を助けるために、ニューＳＵＮ君を手に持ち、上から水を注いでそれを何度もくり返して、日に何度となく、さらにエネルギーの高い量子水を飲ませたいと努力し続けていた母親が言った。

「社長、勝手に、自動で*コアを何度も通した水をつくる装置をつくってよ」のひとことがきっかけとなった。最初に大きなサイズのリバース、それからサイズをスケールダウンして、ようやく卓上型のヘキサゴンが登場するまでに７年を要した。ステンレスや強化ガラスの容器の中で、ステンレスの六角コアをゆっくり回転させると金属の自由電子が縦横無尽に動き回って水が量子的にエネルギーを変化させる。

だから、モーターから何もかも全てをステンレス製の部品にしなければダメだ。
はじめはそれがわからずに、パッキンのゴムが溶けたり、金臭い水になって失敗をくり返した。

おかげで、今ではこの水を飲用したひとが、様々な症状改善や中には奇跡的な体験を含む病気回復の事例を報告してくれる日々が続いている。（*コア＝フィールド変換器の愛称。）

かつて、交通事故の後遺症で原因不明の不定愁訴に悩まされ続けた野村さんにとって、それはこの上もないうれしい状況で、まさに開発者冥利につきるひとつの到達点であるともいえる。
あのとき、30 億に目が眩んでいたら、おそらく、こんなことにはならなかっただろう。

ただ、それは、まだ、ゴールではない気がする。

量子水に興味を持ち、信じてシリーズ製品を愛用してくれたひとたちとの出会いを通じて新しνG7い製品開発につながり、それがまた、ひとに伝わり、量子水の輪が広がってゆく。まるで、池に投げ入れた小さな小石の波紋が伝播してゆくように、きっと、これからもそれは続いて行くと信じている。

ここで話は少し脱線するが、ご愛用者の方から寄せられたエピソードをいくつか紹介しよう。

まずは、熱帯魚の水換えがあまりいらない。
切った野菜のヘタを量子水で再生させるとどうなるか。
そして、水道水と比較して数ヶ月経っても榊の枝が枯れない事例。

こうして時折、ご愛用者から写真入りのコメントが寄せられることがある。
自宅で実験してみたらこうなった。あくまで自発的な実験結果だ。

ある60代の男性(公務員OB)が友人に勧められてニューＳＵＮ君を蛇口に着けて注水した。
それまで、数週間に一度オーバーホールしていた水槽の水換えをしないで様子を見たところ「減った分だけ量子水を足すだけで、きれいな状態をキープできている。

しかも、月に数匹は死んでいた小さな熱帯魚が死ななくなった。
底の貝類も大きくなったし、藻も生えないよ」という。

ある主婦の方は、台所で、料理の度に根菜類や葉物野菜のヘタを量子水に浸けて水耕再生するという。
「にんじんのヘタや玉ねぎの根っこを量子水に浸けると、数日のうちに新しい葉っぱが伸びてきて癒されます。

たまに、摘みとって味噌汁の具にしたり、鉢に植え替えて小さな人参が収穫できたこともあります。
生きているんだなぁって実感します」というのだ。

そして、榊をグラスに挿して水道水との比較を試みた70代の男性は「水道水につけた方は枯れてしまい、量子水に挿した方はまだピンとしていて生きています」。また、別の歯科医の先生は「榊が８ヶ月経っても枯れません」という。

量子水を使いはじめると、今までになかった発見があるようだ。
ひょっとすると、わたしたちのからだの細胞の中でも似たような現象が毎日発生しているとしたらどうだろう。

これらの現象は、わざわざ、波動がどうこうと誤解されかねない説明を加えなくとも、誰でも子どもでも自宅に居ながらにして、いつでも再現性を確認できる物理現象なのだから面白い。例えば、犬や

猫は、何の疑いもなく器に入れられた量子水を飲む。
飼い主によれば「以前は、あまり水を飲まなかったのにふしぎね」という具合だ。試しに量子水とは別に水道水を置いてみたところ、ネコは見向きもしなかった。

つまり、それまでの経験や記憶から、脳に刷り込まれた、たかが水という思考を越えられないのは、わたしたちヒトに限られたことなのかも知れない。

あるいは、農業や畜産の現場でも、量子水栽培によって、糖度が上がったり、連作障害がなくなったり、大きく、しかも早く育ったり、子豚が多く産まれたりして肉質も優良になり、高付加価値のプレミアが生産者を喜ばせているのも事実だ。

こうして、効果を如実に発揮して結果をもたらしてくれるなら、エセ科学といわれようがどうでもいい。一度に大量の水を摂取して水中毒にでもならない限り、　＝水で副作用が現れる心配も H20 ない。

しかし、メーカーとしてはそれではいけない。野村さんは、研究者や大学と共同で今でも量子水の作用機序を解明する努力を続けている。中でも、ミトコンドリア活性についての試験結果は、ワカメから植物、菌類、動物、ヒトにいたるまで真核生物の活動エネルギー産生において、量子水の飲用が飛躍的な効果をもたらすことを示唆している。

何故なら、活動エネルギーである

ＡＴＰの産生の最終工程では、電子の受け渡ししか起きていないのだから。
飲めば元気になる水、神経をはじめ電気信号によって制御されるわたしたちの生体活動を、よりスムースに維持する潤滑剤となり得る量子水、そのはたらきを現代までの科学ではまだ解き明かせないだけだと考えている。

また、工業系の考察では、もともと赤錆の付着した水道部品を量子水が通過し続けると、３ヶ月ほどで黒サビに変わる現象も確認できた。これは、いわゆる還元作用を示していて、本来なら常温では有り難いとされる物理変化なのだ。還元作用が起きているとは認識できても、何故そうなるのかは、学者の先生でも予想の域を出ない。

だから、興味を持つひとだけ、わかるひとだけ、論より証拠というひとだけが喜んで使ってくれ、周りに伝えてくれればいい。それは、強がりや開き直りではなく、見えない解明できない科学領域へのリスペクトでもある。

いくら理論がすぐれていても、フィールドに出したら結果が出ない、試験管の中の限定的な域でしか効果を発揮しないなんて、さほどの意味も持たないではないか。世の中にはそんなものがあふれ返っている。

もとは、エネルギー変換装置として開発されたνG7 シリーズだが、各種特許を取得した 2008 年頃から、老舗の料理店やホテル、スポーツジム、病院、大学の附属施設、大型商業施設など比較的規模が大きい施設にも導入される事例が出はじめた。

オールステンレス製で径の大きな元付け機種はそれなりに高価なので、最初は、一定期間のテスト設置を経て導入になるパターンにしていた。

配管元付け機種は設置工事を伴うので、慎重に対応するとともに改善した結果が出たことを確認できるのが大前提だろうと考えた。

おかげで、ほとんどの場合は効果を確認してそのまま導入へと進んだ。

いくつかの例では、現場の評価は上々にもかかわらず、上司の懐疑を晴らすこと叶わず、いったん取り外した後で、状態が元の木阿弥になってしまい、結局、νG7 の実力が認められて正式採用になるというなんとも無駄なステップを踏むパターンもあった。

沖縄のあるスポーツジムでは、プールや温浴施設を併設しており、νG7 の抗菌性能に目を見張った。「検査担当者が、一日に千五百人も利用する浴場で大腸菌がゼロなんて考えられない。いったいどういうことなのか」といっていると連絡を受けた。

水道水を改質しただけの量子水が、塩素など投入していないのに、どうして大腸菌やレジオネラ菌、ノロウィルス、COVID-19 などを抑制するのか、ひと口に説明はできないが、膜やスパイクタンパク質を溶解しやすい状態の水に変わっていることは確かだ。

その鍵をにぎるのはやはり電子で、水そのものの界面活性の向上や電子のアタック(緩衝)をもたらすと考えている。だから、水道管元付けの機種を取り付けると、そこから先の水はすべてが量子水に生まれ変わり、水回りの配管や浄化槽などの設備延命と施設利用者やスタッフの健康に資することにつながる。

先ほど話題にしたヘキサゴン、リバースは、モーターでコアを回転させ、通水回数が増えれば増えるだけ、電子のスピンによって生まれるだろうエネルギーが増幅して、量子水の活性が高まる仕組みになっている。これを元付け機種に応用したのが、多連式のνG-１Ｌ(ニュージーワンエル)シリーズだ。

食品加工場などでは、排水に含まれる油脂の分解を高めるため、あるいは工場内の臭いを解消する目的で、川上から流す水をすべて量子水に改質するのがねらいのひとつだ。中には、代表者が量子水にとても興味を持ってくれ、複数のνG7 を追加接続してくれた水産加工場もある。

今ではなんと 12 連結式の装置になっていて、その結果、仕上がった製品の出来栄えもすこぶる向上して、売り上げが増えたとも語ってくれた。

こうして、興味を感じて、目の前の結果を信じて使ってくれれば状況は益々改善される可能性がある。今では、幸いなことに、多方面で導入実績が増えて、テスト設置をしなくとも、製品を即納できるようにもなった。近年は、大手外食チェーンや新築の高級マンション、介護施設、プール・温泉施設、複合商業施設などでも導入が増えはじめている。

そこで、これまで必要に迫られて、数々のラインナップをそろえてきた野村さんのいちばん思い入れの深かい製品を尋ねたところ、まずは「６連式 40A」それから「テラヘルツ浄水器」、いずれもコアを６連式にしたら飛躍的に性能が実感しやすくなったからと回答があった。

そして「以前に比べると、世の中に干渉し合う電磁波が増え続けているからなのか、コアを多連にして、ある程度のエネルギーにしないと太刀打ちできなくなってしまっているのかも知れない実感がある」とも説明してくれた。

たとえ電磁波に敏感でないふつうのひとでも、周波数は目に見えないからこそ、それなりに身を守る意識が必要な時代になってしまったのかも知れない。

これからは、波動医学の時代

これまで述べてきたように、量子水の大ファンもいれば、懐疑的なひともいて、ひとそれぞれという他はない。量子物理学の分野では、その意識すら特定の波動(周波数)を持ったエネルギーだと明らかになってきている。

Ｓの字を横にしたような波形は、海の波に代表されるが、身近なところでは、音も色も見えないが固有の周波数を持った波のエネルギー。ヒトの耳では20Hz(ヘルツ)から２万Hzの音が聴こえるというが、犬なら65 Hzから５万Hzで、ヒトの数倍以上聞こえる領域が広い。

また、色では、ヒトは太陽光に由来する、いわゆる可視光線領域の赤から紫の色を見分けることができるが、その外側には赤外線、紫外線、Ｘ線といった目では感知されない周波数帯もある。波の振幅が短く激しく振動しているほどエネルギーが大きい。また、虹の色は日本では７色がスタンダードだが、東南アジアでは、４色、３色と受けとめる国もあるらしい。

つまり、それは、実際に誰が見ても何色と決まっているわけではなくて、見る人々の習慣性や日差しや気候の違いとも相関があって、どれが正しいというのではない感覚のちがいというわけだ。

つまり、それぞれの感覚によって、同じ虹を見ても、わたしたちは異なった自分特有の世界に生きていることにもなる。だから、量子水についても処理する前の水の違いや連結したコアの数や判断するひとの感覚によっても性質がちがってくる。ふだんはあまり意識していなくても、わたしたちをとり巻く環境には、様々な周波数を持ったエネルギーが影響を与え合っているからだ。

近年、話題に上ることの多い家電、各種通信機器から発せられる電磁波もそうで、それらの周波数は、同じものは共振して力を強め合い、逆に反対のものは緩衝して弱め合う。

例えば、古典的な理科の実験で、いくつかの異なったリズムのメトロノームを同じ空間に置くと、ふしぎなことに次第に同期して、しまいにはすべてが同じリズムを刻むようになる映像を見たことがあるだろう。また、その反対に、海の波と汽水域の川の流れがぶつかり合って、白い境界の線に見られる打ち消し合う波が現れるのが緩衝の一例といえる。

ましてや、わたしたちは、自分がエネルギーを放射しているなんて思いもよらないが、人体も含めてすべての物質はテラヘルツ波をはじめとして、固有のエネルギーを放射している。

さしづめステンレス製のνG7の場合は、金属の隣り合った原子同士が、自由電子を共有しているから、縦横無尽のスピンエネルギーが巡り巡り周りに影響を及ぼしていると考えられる。

だから、永遠に原子核を回り続ける電子のスピンと原子核の共振共鳴の位置エネルギーが、磁気と電場のエネルギーを生み出すことになる。

電気(電子の流れ)と右巻きの磁界はコインの裏表のような切っても切れない表裏一体の関係にあることは、中学の理科で教わるレベルの事実で、実は、エセ科学でも何でもないのだが、興味のないひとにとっては、そんな理屈は意識の何処にもないから、何も存在しないのと同じことなのだ。

2013 年の終わり頃、ハワイの代理店関係者(ドクター)の尽力で、野村さんは急ぎ渡米し、世界的に著名な、米国で世紀に名を残す 10 名の科学者のひとりといわれる天才物理学者、スタンフォード大学名誉教授のウィリアム・Ａ・ティラー博士に面会することになった。

この教授は、すでに世界的な物理学の教授であったが、後年は、見えない意識のはたらき、量子力学との兼ね合いなど、今、まさに語っている近未来的なテーマをいちはやく研究してきたまぎれもない第一人者の博士なのだ。

たった 15 分の面会時間だったが、とても貴重なエポックな場面として、一生記憶に残ることになった。

教授は、右手にコアを乗せて、実ににこやかに微笑んで、「おー、ここから電子が出ているね」とおっしゃった。長年、その機構を解析できずに来たが、こうして、大天才からお墨付きをもらったのだ。

このエピソードは、ホームページをはじめ、これまで折に触れて語ってもきたが、その件で特に質問を受けたこともひどく興味を持ったひとに出会っこともない。

野村さんは、世の中とは未だそんなもの、常識なんてそのくらいだと逆に納得した。
例えば、手のひらにコアをにぎって、脳波を測定すると、いわゆるアルファー波が顕著に現れるデータがある。もちろん、そのひとのコンディションやストレスなどにも依るだろうが、起きたこととしては、再現性のある事象だ。

いちばんはじめのところで、MRI や MRA と例を挙げて説明したように、医療の現場では、脳波や心電図などとはちがう仕組みで、生体の極微弱な直流の電気をキャッチして診断に活かすようになっている。

しかも、それは、非接触で電場や磁場というフィールド(空間領域)を測定していることにもなるから、量子水を生み出すエネルギーフィールド変換装置とカテゴリー的には類似のシステムということができる。

そして、単なる検査だけではなく、近未来では、そういった見えない波動(周波数)が影響を及ぼしあう磁場や電場のフィールドを通して、そこに共振共鳴させる技術を使って治療するのがスタンダードになる可能性が非常に高い。

野村さんが、苦労して追証し続けてきたのは実はコレだったのかも知れないのだ。

20 年早かったのかも知れない。

少し先を行くヒトは往々にして周囲に理解されずに苦労する。
野村さんにとっては「私の水族館」がもたらしてくれた利益は、想定外の恵みに過ぎない想いがあったのだろう。だから、もっと富を増やそうとか、業界を制覇しようとか、そういう俗っぽいことにはあまり興味がなかった。

戦後、７年ほどして長崎市内で生まれた野村さん自身も被爆二世の立場ではあるし、生きること生かされることに真摯に向き合ってきた結果だともいえるだろう。人生は、時に錦の織物やタペストリーにも喩えられる。生まれて死ぬまで 100 年ほどの間に、知識を得て、何らか世の中にも貢献したいと努力するが、無意識の目には見えない綾のような不思議な巡り合わせに満ちている。

それに素直に従うことが、自分をとり巻く周囲や、ひいては宇宙全体の量子的なエネルギーとも同調(共振共鳴)することになる。

そう、大袈裟ではなく、意識の転換が必要な時代を迎えているのだ。

わたしたちのからだを細胞ひとつひとつが連なって相互扶助的に統一体をなす生きものと考えたときには、３ヶ月もすれば、個々の細胞は入れ替わって、すっかり別のものになったハズなのに、相変わらず、何も変化していないかのように存在しているのは何故か。

もちろん、年齢を重ねると経年劣化のようなことは起きるし、全体にも反映されるが、しかし、わたしという自己を保っている。これを動的平衡といったりするが、全体を存在の場、つまりフィールドととらえると、まず、フィールドがあって、そこに存在している個別の部品(細胞)なりが、まわりと歩調を合わせながら自動的に入れ替わっていることになる。

この摂理ともいうシステムに反したものの例がガン細胞だろう。だから、量子水を飲用することで、抗がん剤の副作用がなかったとかガンが寛解したといった薬事法に触れそうな体験が報告されもする。

それは、１対１の標的にはたらくというよりは、全体としてフィールド(領域)に好ましい、スムースな環境整備に寄与したと考える方がしっくりくる。だから、様々な改善例が報告されるし、そもそもが水なのだから、マイナスに作用することは考えにくい。

似たような事例に、乳酸菌は増え、そこにいたはずの大腸菌は淘汰される現象もある。同じ菌類なのにどうしてかと首を傾げるが、ひとことで菌といっても微生物は、ウィルス、細菌、病原菌とカテゴリーがちがうから、適正な環境も異なり、生命場としての環境がどの菌に適しているかによって、菌層は異なるバランスになるのだろう。

わざわざ、都合の悪い菌を増やそうとして環境を整えない限り、νG7 の設置で改悪(腐敗や有用菌の死滅)に向かった事例は聞かない。これなども納得のいく説明は難しい。

もしかすると、ステンレス製のνG7 から発せられる金属の自由電子エネルギーが、音叉のような役割を果たしているのかも知れない。フィールド内で様々な周波数を持つものがお互いに影響を与え合うからνG7 発せられる周波数は一定であるから、共振共鳴するものは増え栄え、反するものは淘汰される。

フィールドは、まるで意識を持っているように振舞う様に見えるがあくまで、物理的な現象に過ぎない。怪しくもなんともない。

例えば、世間によくある水の説明と比較しても、量子水そのものは、酸化還元電位もプラス側にあるし、溶存水素量を測定しても、48 時間後を頂点として、じわじわと発生してはいるが、水素水と名付けるほどの存在量でもない。

なのに、効果を発揮するのだから、水素や酸素＝水の構成原子以下の電子をはじめとする量子(素粒子)の変化が、フィールドのエネルギー変換のはたらきをすると考える方が逆にイメージしやすいのではないのか。何かを意図的に反応させようとするわけでもないし、外から無理やり気体を封入して水に機能性を付加しようとするのでもない。勝手にそうなるのだ。

しかも、νG7 には濾過機能は付いていないので、一度設置すれば、ほとんどの場合には、長期の使用に対してメンテナンスもカートリッジ交換も必要としない。これは、セールスポイントとしてはかなり大きい。

2010 年、νG7 を導入してくれた東北の大規模食品加工場では、11 年の大震災の津波で壊滅的な被害を被ったが、その後、みごとに復活して今でも を愛用いただいていると報告を受けている。

その工場では、濾過、紫外線で滅菌した海水を量子水に変換して、加工場全体に行き渡らせており、取材当時、選別作業場で劣化の早いサンマを鼻に近づけても臭わない。スタッフは、魚臭さがなく加工場で働いている気がしないと話していた。たぶん今でも変わっていないだろう。

νG7 導入には、それなりに高額のイニシャルコストや設置工事が伴う。長期間使用できるのは必須の条件といえる。しかも、事業に水を一滴も必要としないところなどほとんどないのだから、それは特殊な事例でも何でもなくて、汎用性と永続性を伴っている。

「孫子の代まで使える」というと笑うが、三代先まで商売が永続するのはかなり難しいのもまた現実ではある。みんなそうであって欲しい。

そうして、元付タイプのνG7 が各種の業界で浸透しはじめた頃、野村さんは、ある大手の空気清浄機の会社に呼ばれた。「確かに効果が出る。どうしてそうなるのか示なければ販売できない。作用機序を説明しろ」という。正直に、化学式では全体を表せないと答えると叱られた。

そうして、一度ではなく三度まで呼びつけられたとき、二度とこないと宣言して決裂した。マスを相手にする会社と、ひとつひとつの事象に懸命にあたろうとする小さな会社では考え方も使命もちがうものだ。

もちろん、効果の裏付けとなる理屈は探りたいが、個別の試験結果を点と点でつないだところで、しょせんは全体にはならない。それは、そっくり、今のわたしたちが知っている科学の範疇には、すべてを凌駕する答えがない現実を指している。

いつか、それを説明できれば光栄だが、おそらくは不可能に近いだろう。

わたしたちの科学では、水の特異点が何故摂氏４℃なのかを誰も答えられないし、個体の氷が液体の水に浮かぶのは、どういうわけかも知らない。

しかし、理屈は知らなくてもその恩恵を享受することはできる。量子水はそのひとことにつきる。残念ながら、すべてを解明できるわけがないのだ。運良く何かを突きとめても、探れば探るほど、また新たな課題やふしぎが現れるのできりがない。

答えは自然の中ある

赤ん坊の瑞々しい肌と高齢者のシワシワの肌とでは明らかに水分量がちがうのは一目瞭然だろう。ひとことで水といっても、細胞の中の状態は、時と場合により異なっている。例えば、タンパク質合成の現場では、周囲の環境が激変するのを防ぐ意味からか、タンパク質をカバーする形で三重の状態の異なる水がとり巻いているらしい。

それは、内に行くほど動かない、ガッチリとガードしている状態なのだという。
細胞内液の 70%が水なのだから、あらゆる合成の場、触媒として機能していると考えられるが、この場合、水がいちいち、こうしようああしなければ、と考えているはずはないので、隣り合うものがＡなら、あるいは、ＤＮＡのように、このユニットの組み合わせならこう、と自然の摂理のようにフォーメーションを自在に全自動的に組み替えているのだと推理できる。

先に説明した動的平衡のように、フィールド領域にかくあるべしと電場や磁場の情報をキャッチして、自律的に機能していると考えるのが妥当と思われる。

自動的にというと怪訝に思うかも知れないが、実際、わたしたちは呼吸の制御、まばたき、視覚聴覚の神経伝達に至るまで、ほんとうは、ほとんど自分の脳で判断指示しているわけではない。

からだの部位としては、もっとも水を蓄えている大腿部には赤と白の筋肉があるが、この筋肉を動かすタンパク質、アクシン、ミオシンのオンオフを制御する場にもこの層状の水が関与していて、それはまるでシャーベットのように、氷(個体)、水(液体)、水蒸気(気体)以外の状態が存在することを示しているという。

どんな条件の時にどんな状態になるのかは別としても、水には多種多様な「場」としての存在パターンがあるのだ。そのひとつひとつについては、何故そうなのかを今の段階では説明のしょうがない。

何度もいうが、今のわたしたちの知り得る科学では、水のふしぎを納得のいく形で説明できない。物理学者の卵が研究テーマを選ぶ際に「水には手を出すな」といわれるらしいのはそのためだろう。答えを求めても際限がない。それは、わたしたちの生命が、いつどうして、たぶん海かいのちら生まれたのを仮説として説明する以外にないこと。

もし、水の特異点が摂氏４℃でなければ、冷たい海の表面は固い氷で覆われて、生きものの繁茂する条件には決してならなかったと推察されること。そして、何故そうなのかを説明し尽くせないことは自明である。だから、エセ科学と揶揄されても無理なものは仕方がない。

今から 100 年前のオーストリアにヴィクトル・シャウベルガーがいた。彼は類稀な観察眼を生かして、河川の流れを研究し、水の浄化作用がどういう仕組みで起こるのかを解き明かし、逆三角形に求心的に引っ張り込む右巻きの螺旋エネルギーに着目した。

これが、νG7 の筒の中で起きている現象のいったんを示していると考えられている。だから、量子水の説明には、自然界のはたらきの一部を再現したと書いている。あくまでもほんの一部に過ぎないが、六角のハニカムコアを通過する水が、自然界の岩場を走る渓流の流れに似た条件と重なり合い、瞬時に劇的に変化するのだ。

この螺旋は、ＤＮＡや潮の渦巻き、貝殻、ひまわりの種の模様など自然界の至るところにフラクタル(相似形)に現れ生命のシグナルとして点在する。これもまた、何故そうなのかを解明はできないが、太古の昔から、生命現象の場に幾度となくくり返し現れて、自然の摂理といった根源的なものを表している符号のようなものと考えられる。

水から生まれ、水に依存して生命を維持しているわたしたちは、この自然現象に沿うことなくして、生命を全うすることはできない。

努力しても部分的にしか説明できない。その一部をかろうじて再現するだけだとしても、生活の中の水を生きている水に戻したい。

いのち輝く水をテーマとして、量子水をさらに追求し続ける野村さん。
そして、ウエルネスの想いはこれからも受け継がれてゆくだろう。

北九州市小倉北区にある「クサバ歯科医院」を訪ねていく！

「漢方薬・鍼灸・オーリング研究所」

研究熱心な草場医師が、株式会社「ウエルネス」のνＧ７量子水と出会うのは、２０２１年半ば、代理店の人から「量子水」の入った青い瓶を出されて「あっ、これいいですね」と「直観的に本物だ」と理解したためである。

そのときのいきさつと体験は、２０２３年１月の「ウエルネス＠タイムス」第１７号での「いいもの研究所」のレポート「抗ガン剤にも絶大な効果があるヘキサゴン３０」（リバース水）でも報告されている自身の体験として、オーリングテストでも確認しているが、オシッコの水銀とか銀、鉛などが出ているいう。

つまりはデトックス効果がある。

そして、以前から、寝ているとひと晩に５回も脚が攣るので困っていたのがなくなったつこと、血圧が下がったことなど、いろんな水がある中で「最高の水だな」と、患者さんにも薦めている。

彼らから聞くいろんな効果として、痩せた、リウマチが寛解した、抗ガン剤を使って顔が浮腫んでいた人の浮腫みが消えた、抗がん剤の副作用がない髪も抜けない、ガン細胞が消えたと医者から言われたといった体験談が集まったというわけである。

量子水の貴重な理解者

「ウエルネス」の企業としての特徴は、ユーザーというか、ファンが実名で、時に顔写真入りで自らの体験談を語っていることだ。『νＧ７量子水』（三和書籍）には、開発者ののホンネ、ありがたいこととして「基本的にクレームがないこと」と記されている。

「ウエルネス」の一連の商品は、活水器、エネルギー水など、様々な言い方をされているが「量子水Ｒ」なる呼称は偶然ではない。量子は新しい時代の科学だからである。

量子水ユーザーの中には、多くの社会的な地位のある人物もいて、彼らも実名で登場している。草場医師も、そんな一人というわけである。

先にあげた「幸せ」がテーマのＦＭ放送でも、旧知のパーソナリティから「ずいぶん顔色が良くなっている」と言われて「毎日、量子水（リバース水）を飲んでいるせいじゃないかな」と喜びを語っている。

放送でも、自身の体験として、脚が攣っていたのが全然なくなったこと。髪の毛が増え つたこと。肌がキレイになったような気がすると言って「若返った」と語っている。

その効果は、人間に限らない。生後すぐ草場家に来た２歳半の犬は、量子水だけを飲んで育った。
いまは毎日１リットルの量子水を飲むそうだが、オシッコが臭くない。

お風呂で洗っているわけではないのに、毛がピカピカに輝いている。かつて飼っていた同種の犬とはまったくちがうのだからびっくりするという。

そして、今では、代理店から頼まれて新型のシャワーヘッドをいち早く試して（ＬＥＤ＋５・５νＧメディカルシャワー）のお風呂に入れば、温まり方が全然ちがう」と、その良さを積極的にＰＲしてくれている。

もちろん、自分がその良さを確かめて、納得した結果でもあるが、草場医師が「ウエルネス」の貴重な理解者・ファンだからである。

現役の歯科医師が、診療の一環として、西洋でも東洋医学でも治りが今ひとつの患者さんに対して薬でも栄養素でもない「水(量子水)」の飲用を薦めるのだから、近未来の医療を先取りしているとは言えないだろうか？